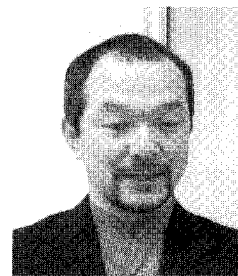


良いオフィスとは？



大倉 清教

①ケプラデザインスタジオ
代表取締役社長

*本稿は、5月20日に行われたセミナーの内容を講師の方にまとめていただいたものです。

オフィスの主役が人間

「オフィス環境の究極の目的は、そこで生活し、行動する人間の観点に立って、知性の働きを助けるために最も適した環境を作り出すことである」と、R.Propstは言っています。

全く同感で、運営の効率化や企業のイメージづくり、運用コストの低減等々、オフィス環境に与えられるテーマは実にさまざまですが、そこで何よりも優先されるべきテーマは「人間中心」であること。オフィスに関わる人々の最終目的はそこにあり、所有する側・使う側・管理する側・作る側、それぞれの立場によってアプローチの仕方に違いがあるだけのことなのです。

生産効果や投資効果を追求したコス

トダウンは、もはや限界にきていることに誰もが気付いているのに、立場だけを守ってコストダウンに固執しているのではないのでしょうか。

オフィスを利用するのは人間であることを再認識し、使い古された言葉ですが、人間的な見地に立ってオフィスを見直すことが最も大切であると考えます。

何が本当に必要なのか

オフィスに対する要求は時代とともに加算され、オフィス計画も非常に複雑になり、多岐なジャンルの技術とノウハウが求められます。その構築・運営には膨大な労力と時間がつぎ込まれるのが現状です。

しかし、どのオフィスも最高レベル

の品質を必要としているのでしょうか。建築物・設備・家具などのハードばかりでなく、サービスや管理の仕組みなどのソフト面においても、すべてを取り揃える必要はないのでしょうか。

というのも、必要なものを必要ときに必要な分だけ調達したり利用できる仕組みが、オフィスの周りに揃ってきているからです。

そのオフィスで何が本当に必要であるか。それを知るの方が大切であり、必要なものをすべて取り揃えるのではなく、使い方を工夫したり必要に応じて利用するという考え方を持たなければなりません。

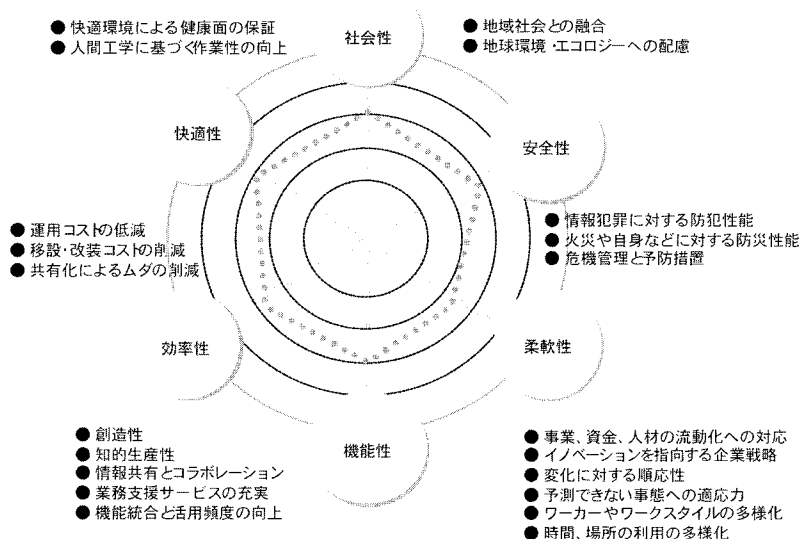
企業活動はオフィスの完成後も外的な環境要因、内的な戦略要因によって変化を余儀なくさせられます。そのツールであるオフィスは、組織や業務の変更に際して、空間だけでなく、それに伴うルール作りや管理の仕方、情報システムや支援サービスのあり方等を総合的に計画しなければなりません。

しかしながら大規模なオフィスになればなるほど、その計画は困難を極め、成功も覚束なくなりますが、まず手の付けられる範囲を絞り込み、オフィス計画を進めていくことが重要ではないのでしょうか。

プロジェクトの進め方には計画的な配慮が必要です。まず自らの企業特性や現状を的確に把握することから始めて、目標やテーマを共有し、それに沿って何がどれくらい必要なかをメンバー全員で確認し、プロジェクト計画に反映させていきます。

それぞれの要求を知る

本当に「最高レベル」が必要なのか？



① Kiyonori Okura © Kepta Design Studio
copyright 2004

次に、全体計画を実現するためにブレイクダウンしたスペース計画や、コミュニケーションやファイリングの計画を策定。これによってはじめて建築・インテリア・設備等の仕様が決定します。くれぐれもこの逆をやってはいけません。

プロジェクトはここで完了というわけではありません。計画をデザインでとりまとめ実施設計して、施工という段取りですが、オフィスが完成したら今度は運用が始まります。このとき、当初計画した税務面やサービス供給、品質等の評価を行ってフィードバックすることが大切になってきます。

プロジェクトは竣工時点がゴールではありません。このことをメンバー全員が理解していれば、それぞれの評価もスムーズに進むはずです。

ユーザビリティの提供

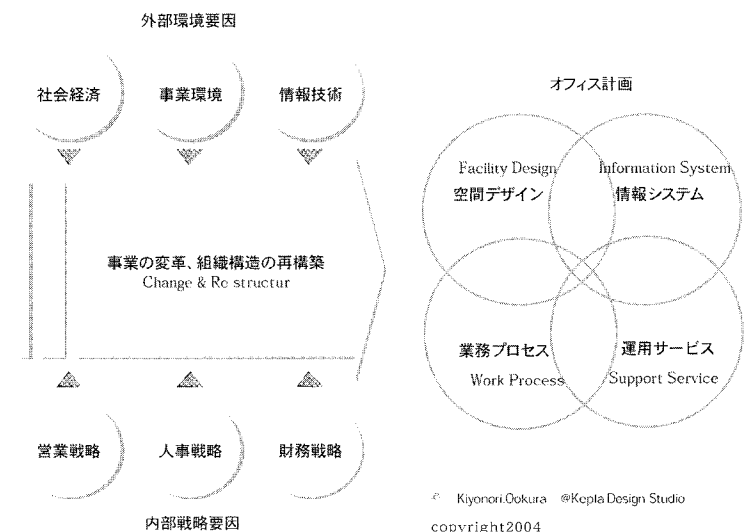
最後に、オフィスづくりの重要なテーマであるデザインの役割を考えていきます。

デザインが目的とするところは、社会環境との調和を図り、人々の心や生活を豊かにすることであり、同時に、誰にとっても優しく、使いやすいというものでなければなりません。デザインはスタイリングやアートとは異なるものであり、流行を追うものではないはずです。

しかしながら、近年のオフィスデザインは本来の使命を忘れ、作る側の営利主義や新しもの好きという自己満足に走る嫌いがあり、デザインの役割と重要性を社会に認知させることができなかつたと言わざるを得ないのではないのでしょうか。

『アメリカの心』という本には、世界で一番クリエイティブな仕事をして

「オフィス計画」は総合的



いるのはホームメーカー（家事をする人）だと書かれています。多分野にわたる知識を持ち、さまざまな道具を使い分けて多くの仕事をこなし、「家」の運営を司っているのがホームメーカーです。

オフィスにおいて、このホームメーカーの役割を担っているのはワーカーです。オフィスを利用する一人一人が工夫して使いやすくしていくこと。それがオフィス本来の、最も理想的な姿であり、決して難しいことはありません。

これからのオフィスデザインには、ユーザー自身の手で自由に変更しやすく、かつ工夫しやすいという視点が必要です。デザインする側には、そのような「ユーザビリティ（有用性）」の提供、言い換えればユーザーが本当に必要としているものを見抜く力が問われてくるでしょう。

一方、使う側には、あてがいぶちの環境に甘んじることなく、自らの環境を高い意識を持って工夫し、活用して

いくことが求められるでしょう。CADなどのプランニングツールもどんどん簡易になり、あらゆる情報とサービスをユーザーに提供する環境が整いつつあります。

パソコンというハードは同じでも、そのソフト、その使い方は人それぞれという時代、一人一人が仕事にあわせて自分仕様のパソコンを使いこなしています。

オフィス環境が、このパソコン環境と同じようにフレキシブルになったとき、オフィスの使い方そのものがオフィスの優劣、評価を決めるのではないのでしょうか。

良いオフィスとは「使いこなすオフィス」であり、その使いこなし方や、オフィスのカタチは千差万別でしょうが、その善し悪しを判断するのはユーザー、使っている人ではないのでしょうか。

